



第1回

「古典の日文化基金賞」授賞式

Classics Day Prize

令和3年9月3日(金)

京都府立府民ホールアルティ

11月1日が「古典の日」として制定されたことを記念し、彬子女王殿下を名誉総裁に奉戴して、日本の古典文化の研究・普及・啓発活動に貢献した個人、法人、団体を顕彰することを通して、古典の日の推進に寄与することを目的に「古典の日文化基金賞」を創設しました。

『源氏物語』や『枕草子』だけが古典ではありません。北海道には「ユーカラ」があり、沖縄には「組踊」があるように、地域の風土と歴史に根差した芸能、文学、工芸、祭事等、多彩で豊かな古典文化が存在します。それは時と所を超えて未来への尽きせぬ知恵の源泉ともいえます。「古典の日文化基金賞」は古典の概念を「我が国において創造され、または継承された古来の文化的所産」とし、生活文化の分野まで授賞対象を幅広くとらえています。

主催：古典の日文化基金賞顕彰委員会 古典の日推進委員会

公益財団法人京都文化交流コンベンションビューロー

後援：京都府・京都市・NHK

協力：文化庁 地域文化創生本部



古典の日に関する法律（平成二十四年九月五日 法律第八十一号）

(目的)

第一条 この法律は、古典が、我が国の文化において重要な位置を占め、優れた価値を有していることに鑑み、古典の日を設けること等により、様々な場において、国民が古典に親しむことを促し、その心のよりどころとして古典を広く根づかせ、もつて心豊かな国民生活及び文化的で活力ある社会の実現に寄与することを目的とする。

(定義)

第二条 この法律において「古典」とは、文学、音楽、美術、演劇、伝統芸能、演芸、生活文化その他の文化芸術、学術又は思想の分野における古来の文化的所産であって、我が国において創造され、又は継承され、国民に多くの恵澤をもたらすものとして、優れた価値を有すると認められるに至ったものをいう。

(古典の日)

第三条 国民の間に広く古典についての関心と理解を深めるようにするため、古典の日を設ける。

2 古典の日は、十一月一日とする。

3 國及び地方公共団体は、古典の日には、その趣旨にふさわしい行事が実施されるよう努めるものとする。

4 国及び地方公共団体は、前項に規定するもののほか、家庭、学校、職場、地域その他の様々な場において、国民が古典に親しむことができるよう、古典に関する学習及び古典を活用した教育の機会の整備、古典に関する調査研究の推進及びその成果の普及その他の必要な施策を講ずるよう努めるものとする。

この法律は、公布の日から施行する。

附 則

平成二十年(二〇〇八年)十一月一日

源氏物語千年紀よびかけ人
源氏物語千年紀委員会

古典の日文化基金賞顕彰委員会事務局・古典の日推進委員会

〒600-8009 京都市下京区四条通室町東入 京都経済センター3階(公財) 京都文化交流コンベンションビューロー内
TEL: 075-353-3060 (月~金 9時~17時土日祝除く) ◆古典の日 HP <https://hellokcb.or.jp/kotennohi>

式次第

総合司会：小谷麻菜美（NHK京都放送局キャスター）

◆「古典の日宣言」 橋本夏果（第12回古典の日朗読コンテスト大賞受賞者）

◆開会の辞 主催者挨拶 古典の日文化基金賞顕彰委員会 会長 村田純一
来賓祝辞 衆議院議員 伊吹文明
文化庁長官 都倉俊一

◆授賞式 [文学・思想] 角田 光代（作家）
[伝統芸能・音楽] 沖縄伝統組踊「子の会」
[美術・生活文化] 山本 茜（截金ガラス作家）
[芳賀徹記念・古典の日宣言特別賞]
ツベタナ・クリステワ（国際基督教大学名誉教授）

◆講評 古典の日文化基金賞選考委員会 副委員長 腸谷 壽

◆お祝いのことば 京都府知事 西脇隆俊
京都市長 門川大作



◆記念演奏

東儀秀樹（古典の日文化基金賞選考委員会 委員、雅楽師）× 東儀典親 × 藤林由里（ピアノ）
大谷祥子（筝曲）× 藤林由里 × 岸田うらら（パーカッション）× 知原佑実（筝曲）

◆記念朗読「草の花」「山柿」「竹芝」（『山本容子の姫君たち』から）

檀ふみ（古典の日文化基金賞選考委員会 委員、俳優）

◆記念講演

彬子女王殿下（古典の日文化基金賞顕彰委員会 名誉総裁）

◆舞台を飾る「源氏物語闇屋・澪標図屏風」は、静嘉堂文庫美術館の協力により、大日本印刷株式会社が高精細複製「伝匠美」にて制作したものです。

※プログラムは予告なしに変更する場合がございます。

※許可のない写真撮影、録音・録画は禁止いたします。

※ホール内でのご飲食、携帯電話のご使用はご遠慮ください。 ※他のお客様に迷惑となる行為を発見した場合、退場していただくことがあります。

◇受賞対象

古典の日文化基金賞は、①古典の深い研究と実践活動 ②古典の幅広い普及活動 ③古典の若者への啓発活動、を評価選考の三本柱とします。この賞は古典文化の活動に対する賞であり、個別の作品賞ではありません。

対象となる古典の定義

贈賞の対象となる「古典」の定義は、平成24年9月5日に公布・施行された法律第八十一号「古典の日に関する法律」に定められた規定によります。

「第二条 この法律において「古典」とは文学、音楽、美術、演劇、伝統芸能、演芸、生活文化その他の文化芸術、学術又は思想の分野における古來の文化的所産であって、我が国において創造され、又は継承され、国民に多く恵澤をもたらすものとして、優れた価値を有するものと認められるに至ったものをいう。」

◇賞の種類

I〈文学・思想分野〉文学、哲学、学術、思想、宗教ほか

IV〈芳賀徹記念「古典の日宣言」特別賞〉

II〈伝統芸能・音楽分野〉伝統芸能、演芸、演劇、舞踊、音楽ほか

令和2年2月20日にご逝去されました古典の日推進よりかけ人 芳賀徹先生の古典への推進活動に

III〈美術・生活文化分野〉美術、工芸、生活文化、祭事、その他の文化芸術

進およびかけ人 敬意を表し、初年度のみ授与します（分野不問）。

それぞれの分野毎に特に顕著な功績が認められるものについて授与します。

◇副賞

受賞者には、賞状のほか、正賞（賞牌）と副賞（賞金100万円）を授与します。

〈ロゴマークデザインについて〉

唐草模様は蔓草（つるくさ）の茎（くき）や葉が絡み合って曲線を描く文様である。生命力が強く途切れることなく蔓を伸ばしてゆくことから「繁榮・長寿」などの意味があり縁起のいい文様として古くから人々に親しまれてきました。

唐草文様は古代エジプトやメソポタミアで生まれギリシャ、ローマ、シルクロードを経て、飛鳥時代に日本に伝わったといわれています。「古典の日文化基金賞」のマーク制作にあたりモチーフを創造上の「雲唐草」、夢と品格を感じる表現としました。



Design by 久谷政樹

◇古典の日文化基金賞顕彰委員会 組織図

古典の日文化基金賞顕彰委員会

名誉総裁	彬子女王殿下
顧問	千 玄室 裏千家前家元、古典の日推進よりかけ人代表
	瀬戸内寂聴 作家
	中西 進 京都市立芸術大学名誉教授
	高階 秀爾 大原美術館館長
	木津川 計 立命館大学名誉教授
会長	村田 純一 古典の日推進委員会会長
委員	西脇 隆俊 京都府知事
	門川 大作 京都市長
	松村 淳子 宇治市長
	塙本 能交 京都商工会議所会頭

古典の日文化基金賞選考委員会

委員長	村田 純一 古典の日推進委員会会長
副委員長	脇谷 壽 公益財團法人古代学協会理事長
委員	井上八千代 京舞井上流五世家元
	葛西 聖司 古典芸能解説者
	熊倉 功夫 MIHO MUSEUM館長
	檀 ふみ 俳優
	東儀 秀樹 雅楽師
	冷泉貴実子 公益財團法人冷泉家時雨亭文庫常務理事
オブザーバー	安井順一郎 文化庁 地域文化創生本部事務局長

候補者情報調査会

座長	山本 壮太
委員	栗原 祐司 京都国立博物館副館長
	小林 一彦 京都産業大学文化学部教授
	田口 章子 京都芸術大学教授
	濱崎加奈子 京都府立大学准教授

授賞式はなぜ9月3日なの？

平安時代中頃に書かれた『更級日記』の作者、菅原孝標女は少女の頃から華やかで美しい世界が描かれた『源氏物語』等に興味を抱きます。父の赴任先、上総国（現：千葉県）で姉や継母に都で読まれている話をしてほしいとせがむのですが、思うように語ることができないじれったさを感じ、薬師如来に「早く京都にかけて、ある限りの物語をたくさん読ませてください」と祈りました。その念願が叶い、とうとう都に行く希望に満ちた門出が9月3日であったと記されています。孝標娘が心躍り都に旅立つこの日を「古典の日文化基金賞」の授賞式の日とします。

●タイトル「山本容子の姫君たち」より「行火」 ●技法 ソフトグランドエッティング、手彩色
●用紙 和紙、雁皮紙刷り ●制作年 2009年 ●イメージサイズ 30x20mm



受賞者の皆さん

文学・思想



角田 光代(作家)

この長い物語を俯瞰する面白さ、運命がねじれていく面白さを見渡したい

「池澤夏樹個人編集日本古典文学全集」において、『源氏物語』の現代語訳にあたり、読みやすさとスピード感にあふれた表現に意欲的に取り組み、世代をこえた多くの読者の共感を得て、古典文学の普及と啓発に貢献した。

「60歳になったら、再度、新訳に挑戦したい。」

将来の新訳『角田源氏』にも期待して・・・。

『源氏物語』の現代語訳を終えたのち、宇治を訪れて、深く感銘を受けました。千年以上も前から流れる宇治川を前にして、過去と現在と、物語と現実とが、一瞬でまじりあうのを体感したのです。川は流れ続け、人は悩み、かなしみつつも日々を暮らし続けている。千年ものあいだ読み継がれている物語は、ひとりの人間が生きる時間だけではけっしてわからないことを、なまなましく体感させてくれるのだとそのとき気づきました。

このたびはすばらしい賞をいただきまして、本当にありがとうございます。

角田 光代

受賞のことば

1990年「幸福な遊戯」で海燕新人文学賞を受賞しデビュー。96年『まどろむ夜のUFO』で野間文芸新人賞、2003年『空中庭園』で婦人公論文芸賞、05年『対岸の彼女』で直木賞、06年『ロック母』で川端康成文学賞、07年『八日目の蝉』で中央公論文芸賞、11年『ツリーハウス』で伊藤整文学賞、12年『紙の月』で柴田錬三郎賞、『かなたの子』で泉鏡花文学賞、21年『源氏物語』(全3巻)第72回読売文学賞他受賞多数。

伝統芸能・音楽文化



沖縄伝統組踊「子の会」

文化、それは地域に生まれ、
地域に根ざし、永遠に花開く

「組踊」の伝承者としての活動を通じて、先達から脈々と受け継がれてきた文化遺産である沖縄の伝統芸能の世界を保存発展させ、次世代へ継承していくことに貢献してきた。「子の会」の名前の由来でもある、琉球王国の土の誇りと、美ら海のような清い志をもって、今後とも、沖縄の古典芸能の普及発展に尽力していただきたい。

この度は「古典の日文化基金賞」という栄えある賞を賜り誠にありがとうございます。受賞のお話をいただき、正直本当の事かと耳を疑い驚いているところです。

沖縄伝統組踊「子の会」は、沖縄伝統芸能「組踊」の保存・継承につとめ、沖縄県内外における組踊の普及発展に寄与し、併せて会員相互の技芸向上を計ることを目的に活動しており、発足して今年で14年目となりました。日頃よりお世話になっている国立劇場おきなわを始めとする、すべての関係者のお力添えのもと、これまで多くの活動をさせていただけたことが、今回このような栄えある授賞となったことを感じており、今後も感謝の気持ちを忘れず、琉球芸能がより発展していくよう努めて参る所存でございます。沖縄伝統組踊「子の会」会長 喜納 吏

2008年4月1日(国立劇場おきなわ組踊研修修了生で構成)設立。設立当初から現在にいたるまで、主に沖縄本島内の高等学校において「組踊鑑賞会」を定期的に開催。2015年4月から日本大学芸術学部において「組踊ワークショップ」を行い、成果発表会を開催。国立劇場おきなわの「沖縄伝統芸能『組踊』鑑賞と琉球史に触れる1日」は、年間を通して講師を務める。2017年から文化庁「文化芸術による子供の育成事業」を受託し、関東、東北・北海道、関西地区においてワークショップ及び鑑賞公演を開催。21年は、四国・関西地区において開催予定。

受賞のことば

美術・生活文化



山本 茜(截金ガラス作家)

生み出した美しい技は、時を超えた多くの先達の心技に支えられている

飛鳥時代、仏像を荘厳するため伝來した伝統的な截金の技法を、独創的な発想と手法で発展活用し、新たに、「截金ガラス」の技法を創出した。日本を代表する『源氏物語』に啓発され、54帖をモチーフにした作品完成をライフワークにするなど、今後とも、若き溢れる意欲的な活動に期待したい。

このたび記念すべき第1回の「古典の日文化基金賞」を賜りまして、大変光栄に存じます。私が初めて『源氏物語』に触れたのは中学校の古文の授業でした。原文の美しい書きで綴られた雅な王朝絵巻。加えて人生の深い洞察が込められた物語に心を奪われて以来、事あるごとに物語の中に答えを求めて読み返して参りました。自分の人生経験が増えるにつれ共感できる部分が増え、新たな気付きがあり、『源氏物語』を通して自らの成長や心の状態を認識できる。ひいては『源氏物語』を制作することが自分自身を表現することに繋がると思い至り、一帖ずつ立体作品にすることをライフワークとしてまいりました。現在22帖分が完成し、残り32作品ありますが、この受賞を励みに全帖完成に向けてより一層精進してまいります。ありがとうございました。

山本 茜

京都市立芸術大学で日本画を学び、99年 独学で截金を始め、2000年 重要無形文化財「截金」保持者の江里佐代子氏に師事。卒業後、富山ガラス造形研究所でガラス成形を習得し、透明なガラスの中に浮遊するかのように截金を封じ込める截金ガラス作品を創案。2019年 大英博物館のパブリックコレクションとなるなど、国内外で高い評価を得る。現在、日本工芸会正会員。

芳賀徹記念・古典の日宣言特別賞



ツベタナ・クリステワ(国際基督教大学名誉教授)

言葉とは何か、日本語とは何か？
文化の原点を問いかける

ブルガリアの日本文学研究者として、来日後も、比較文化の視点から精力的に日本古典の研究を進め、『涙の詩学・王朝文化の詩的言語』等、多くの成果を発表してきた。芳賀徹先生とは、比較文化の研究者仲間として親交を深め、2008年11月1日の「源氏物語千年紀」国際フォーラムでも席を並べ、共に日本文化の国際発信に寄与した。

日本古典文学を織り成す「言の葉」は、木の葉のように、心を種として成長していくので、自然と心という二つの世界の重ね合わせによって作られた美は、存在のエッセンスを表しており、永遠である。私たち現代人がパソコンやスマートなどの画面の前に過ごす時間が増えるにつれ、その文学が色や香り、生き物の鳴き声を通して、失われつつある感覚の世界を覚えさせ、人間性について考えさせてくれる。それゆえ、古典の残り香が今もなお香りづける京都で2008年に宣言された「古典の日」の重要性は一層高まっていくだろう。その宣言を記念する特別賞の受賞は、この上ない光栄で、嬉しいことでございます。「嬉しきも憂きも心は一つにてわかれぬものは涙なりけり」。ありがとうございます、芳賀先生。ありがとうございます、京都。

ツベタナ・クリステワ

ブルガリア、ソフィア生まれ。ソフィア大学東洋語・東洋文化センター日本学科初代主任を経て、1992年以降、日本で活躍する。国際日本文化研究センター客員教授、東京大学客員教授などを歴任。現在、国際基督教大学名誉教授、早稲田大学文化構想学部・大学院非常勤講師。著書に、ブルガリア語での『水茎の跡』、日本語での『涙の詩学—王朝文化の詩的言語』、『心づくしの日本語—和歌でよむ古代の思想』などがある。『とはずがたり』や『枕草子』などのブルガリア語訳も。